

ホトトギス

九月号



俳句随想〔三百八十七〕

汀子

天地有情の投句の裏に通信欄がある。色々書いて下さる方にはお返事は書けないが、しっかり読ませて頂いている。俳句随想で文法の間違いを指摘したことでよく分ったと感謝が述べられていて恐縮した。私自身も戦争中の女学校、そして高校三年と勉強が出来なかった時代の人間である。俳句の世界に於て勉強させて頂いたと思う。そして、今でもその勉強は続いている。私の知る範囲でこれからも書かせて頂きたい。

「山笑ふ」という季題がある。この季題の山と笑うを一句の中で離して使われた俳句を見た。例えば「四五人で行く山樂し笑ひけり」と、これは頂けない。また、「庭に出て薫る二三歩風の中」とこれも「風薫る」という季題として頂けない。「薫風」として使うことがある。これは正しいし、傍題として歳時記に収録してある。正確に使うことをお勧めしたい。仮名遣いもまだ歴史的仮名遣いを踏襲している。俳句にはその方が相応しい。俳句に関しては歴史的仮名遣いをお書き頂きたい。文章や読むのを助けるためのルビは現代仮名遣いでお書き頂きたい。間違いの多いのは、冷える……を冷へる。植ゑる……を植へる。見える……を見へる。などが最近多くなつた。これは終止形を言ってみれば間違わなくなるであろう。私も迷ったら終止形を言ってみることにしている。

旬日記 汀子

平成二十五年九月二日 下晴旬会

虫の夜の戸締りしかとして一人
秋 出水 雷 鳴 二つ 伴 ひと
稲の花瞬時の開花見逃さず
秋出水あとの始末にかり出され
こほろぎも水を逃れてをりし場所

九月二日 ロイヤル俳壇

日本は農耕の民稲の花
会多き葉月となつてしまひけり
雨止んで露けき心残りたる
露けしや年齢不詳なる人と
台風の進路不明と聞く外出
露の世の命守りて行くことに

九月七日 芦屋ホトギス会

こほろぎに留守をあづけて来し如く
露葎やうやく季節ととのへり
穂をほどく日の待たれたる庭芒

九月十日 大阪倶楽部

台風が消えて残りし雨と聞く
月の名を知れば夜毎に仰ぎたく
山荘の霧の去来のただならず
霧晴れてみれば何でもなき山路
癒ゆる日も近しと聞きぬ月の秋
夕霧の忽ち晴れて帰路となる
蓼科の花野に置いて来し心

九月十日 綿業倶楽部

露しとど降り快晴を約す朝
秋草の供華に明るさ加へたく
露踏んでまだ明けきらぬ旅立に
一と仕事終へて夜露の門閉す
みちのくの露けき旅の帰路となる

九月十二日 清交社

野分てふ風先立てて来たる雨
どの色となくどこまでも花野かな
車捨ていつか花野に紛れぬし

九月十三日 工業倶楽部

七草の揃はぬこともそれらしく
どこまでも芒の景をつなぐ風

九月十四日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

台風の前立てて来る旅路
邯鄲の原と呼びたき一部分
風音を秋声と聞きとめてをり
雨漏ですみし台風一過かな

九月十八日 夏潮旬会

出水せし町に家路をとしり人
秋声や遠く越される人惜み
食欲の減らぬも秋の風邪ならん

九月二十日 時雨旬会

かく晴れし名月の夜を忘れぬし
大方は芒の花野地の果よ
旅疲れこの名月に癒やさるる
三姉妹集ひ秋灯明うせよ

九月二十一日 旬会と講演の会

体調を過信せしかと旅の秋
しばらくは風邪ともなひてゆく旅路
秋の夜の体力気力追ひつかず
男郎花には女郎花侍らしめ

九月二十六日 きさらぎ旬会

台風の方へ方へとある旅路
白といふ色は遠目に男郎花
露けしや庭石一つづつ見ても
皆ほつとせし秋晴に包まれて

九月二十八日 北信越ホトギス俳句大会前日旬会

薄紅葉庭の饒舌はじまりぬ
芒から芒へ山路又山路
水澄まぬダム湖足下に露けしや
近づけば白山隠れ花芒

九月三十日 アサヒカルチャー

旅帰りしたるばかりに露踏みて

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年九月三日 カトリック新聞選者時

北国の炎天といふ神慮かな

九月五日 蕉心会

颯風に呑み込まれんとする都心
新月の今宵を遠くしたる空
長き夜やふと忘れたる母の顔
この雨に灯下親しく集ふ幸
夜食とる仕事の山を睨みつつ
大川に水の存問 秋の潮
芋食うて俳諧語る佳人かな
屋の虫館の庭てふ静けさに
曇天に色を浮かべて百日紅
あなたには砒素彼女には烏頭

九月六日 六甲会

枝豆も酒も丹波といふ生活
三日月に見破られたる小さき嘘
枝豆や丹波に疎開せし頃を
三日月や三十余万キロの黙
三日月を育ててゆきし星の綺羅
三日月にスカイツリーの突き刺さり

九月七日 芦屋ホトギス会

嗚呼松山引退露のタイガース
コルク栓抜くより寝めく夜食
ビル出れば蟋蟀といふ丸の内

九月八日 虚子館出句

芒散る人の余命といふ運命

九月八日 野分会芦屋例会

震災忌 京極 杞陽てふ記憶
腕時計新しくイエムとして
鉦叩忌日のレクイエムとして

九月九日 朝日カルチャー若草句会

花野行く二人の背中消ゆるまで
桃剥いて食卓の朝始まれり
一幹の竹の春より里の景
夕闇を引き寄せてゐる竹の春
吉備の里とは一歩より桃香る

九月十二日 十筆会

夕食は洋風 夜食中華 風
蠟燭の枯れゆく歩幅ありにけり
鶏頭の咲いて空気の入れ替はる
鶏頭を咲かせ根岸に遠く住む

九月十四、十五日 伝統俳句協会全国俳句大会

石狩の風が奏でる 芒かな
揺るるより芒は丈を競ひ合ふ
初鮭に大河は黙を解きにけり

九月十七日 「俳壇」グラビア一句

タンノイの響き爽やかなりしこと

九月十八日 百夜句会

秋出水あの橋で恋語りし日
蚯蚓鳴くあの夜を思ひ出せばなほ

九月十九日 登高会

野分後古都千年を揺さぶれる
夜なべおく今日の忌日を誦ひて

秋草に心の揺れを見すかさね

競ふこと知らず秋草それぞれに

九月二十一日 ホトギス社句会

草の花忌日の供華として親し
タワ一の秀秋分の日の天を突き
人生の伴侶秋分の日の出会ひ

九月二十二日 野分会東京例会

震災忌昨日のことのやうに祖母
鉦叩三つ叩いて果てにけり
鉦叩夜はドラマの生れ易

九月二十四日 若水句会

子規の庭見し昂りに柿を食ふ
忌心を解く露草の丈であり
子規の事虚子のこと柿食へばなほ
水音に目覚めてゆけるほたる草

九月二十五日 目黒学園句会

冷やかに振られし君と再会す
葡萄棚収穫を待つ 静寂かな
冷やかに術後の生活語らるる
太陽も水も友達 葡萄棚
御遷宮伊勢が躍つてをりにけり
子規虚子といふ冷やかな師弟かな

九月二十八、二十九日 北信越ホトギス同人会 大会

菊の賀の準備そこそこ江戸を発つ
鯛雲繋ぐ江戸より加賀へ旅
山粧ふ城の盛衰秘めしまま
秋風に抱かれてパラグライダー
気がつけば粧ふ山の懐に
露けしや故郷ダムの底といふ

雑詠

廣太郎 選

巢を出づる働き蜂の真顔かな 東京 内藤呈念
 モルダウを聴いて春愁あやしをり 同
 花水木少女手広げ一輪車 同
 忌ごころに眩しく花のこぼれけり 多摩 松井秋尚
 虚子へ向く小さな墓の芝桜 同
 柏槇の影くねらせて春惜む 同
 ふと視線上げ春惜む一教授 神戸 立村霜衣
 風こぼれ来てこぼれ来て卯浪立つ 同
 夏霞へと進水の榮高く 熱海 嶋田一步
 花並木道に人群れ酔ふ人も 同
 花吹雪ぶつかり浴びて並木ゆく 同
 葉桜となりし並木を人通る 同
 雛千みな眼差といふを持ち 大阪 蔦三郎
 薔薇や薔薇ひたすら紅に白に咲き 同
 愛語るかに薔薇の紅薔薇の白 同
 雨はれし落花浄土の只中に 福山 竹下陶子
 陽炎に包まれし子のよろよると 同
 本丸へ落花つむじの立ち上る 同

一山の風奉る藤の宮 奈良 古賀しぐれ
 藤かけのぼり風と化し神と化し 同
 藤棚の人美しくして翳る 同
 三極の花の点描石仏 神戸 山田佳乃
 花吹雪天の回廊駆け上がる 同
 ひもすがら吉野に花を綴る風 同
 団栗の影のちひさく掌 東京 今井肖子
 反転の先の秋天心字池 同
 のぞきこむ顔に日流す秋の水 同
 谷風に又のぼりゆく落花かな 榎原 稲岡長
 水音の落花誘ひてをりにけり 同
 夜の帳降りたる花の息づかひ 同
 葉桜の影踏み行けば影動く 東京 橋本くに彦
 町角の八八百屋夏めく品ぞろへ 同
 樟大樹影匂ふほど若葉かな 同
 空色のまだ残りをり月隴 同
 句碑三つ拝して遅日枳殻邸 同
 閉門を忘れてをりし日永かな 同
 雑魚寝てふ言葉も親し花の宿 長岡 安原葉
 吉野山帰りの花の旅人も 同
 行春や偲ぶ堅田の一詩人 同
 又同じ頁を読んでゐる日永 袋井 湖東紀子
 どの子にも帰る家あり葱坊主 同
 春潮にはみ出してゐる岬かな 同

雑詠句評（八月号より）

純也・一步・雅

さい雪・仁義・比奈夫

公次・くに彦・佳乃

しげ人・廣太郎

春塵に物の形の残りけり 袋井湖東 紀子

春塵を払ひぼろんと弾いてみる 龍ヶ崎 今橋眞理子

ギターか何かの楽器であろう。春塵を払って掃除をしたあと、何気なく、ぼろんと弾いてみたのである。作者の胸には、遠い青春の記憶がよみがえったのかもしれない。（純也）

ギターを想像するが、昔はよく弾いていたところが、何時の間にかやたら全く弾かなくなってしまった。何かきつかけでもあったのだろうか。すっかり忘れていたのが、こちらでも何かのきつかけで見付けたのである。先ず「春塵」を払って弾くと、昔の思い出がしみじみと甦ってきたのであろう。素直な句である。（廣太郎）

春塵とは春になって地上の雪などがなくなり地の表面が乾燥した状態のときに春ならではの強風が吹き、その地面の土などが埃となつて舞い上がったりして空気が濁つて見えることを言うのである。そのような春埃というか土の塵が野外にあるいろいろの物に積つて其等の物の形を残していったと見たのである。物の形というだけでは、なにか具体的な景が眼に浮んで来ないというきらいがあるが、季題の春塵がどちらかというところ具体的にはつきりしないが故に「物の形の残りけり」と単純に詠つたことが面白いのかも知れない。（一步）

こちらは、何故かピアノを想像する。それも艶々に塗装された黒いピアノがどうしても頭に浮かんでくるが、その上に長い間置かれていた飾だろうか、久し振りに退かせると、周りは「春塵」が積つたようになっており、置かれていた下は綺麗に、その形で残っている、微妙なコントラストが面白い。（廣太郎）（以下略）

天地有情

花子選

別れねばならぬ吉野の花に人に
 朝日得て花軽やかに匂ひ立つ
 みよしのの春告鳥に起さるる
 常宿の母のやうなる大桜
 み吉野の花とどめたく散らせた
 散るために咲き咲くために散つて花
 峰桜日輪淡くのぼりゆく
 夕さるるほどに白さの桜かな
 啄みてついばみて極月の鳩
 冬の日に伸び切つてゐる電波塔
 耳遠くなりたる妻や春の雷
 丘越えてなほチューリップ畑かな
 残る夫へ喪服と白きハンカチを
 後少し生きてみようか山若葉
 春惜むために外出許可もらふ
 春愁を癒して呉れる痛み止め
 落花繽紛命惜めといふさまに
 はらはらと日照雨の降らす花もあり

樋原 稲岡 長
 同 同
 東京 河野美奇
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 同 稲畑廣太郎
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 熊本 永野由美子
 同 同
 神戸 後藤立夫
 同 同
 同 後藤比奈夫
 同 同

卒寿祝ぐ花の城ありホ句のあり
 貝寄風に乗り来し人と卒寿祝ぐ
 清貧は腹の空くもの蝶の昼
 桃色の葉が効きし春の風邪
 烏賊舟の灯を消し音もなく出づる
 影黒く日傘の白く足早に
 雨ながら虚子を恋ふ日の花明り
 花一樹一樹に虚子を偲びつつ
 木の芽どき卒寿よく食べよく眠り
 木の芽どき渡舟惜まれつつ廃止
 漱石の髭の先より春の風
 初花の先ぐんぐんと海ひろがる
 光りては空へ消えゆく柳絮かな
 伐りたての竹の器の菖蒲酒
 考へてみれば途切れて昼の虫
 香を放ち切つたる濁り金木屋
 咲き遅れなきやうに咲き躑躅山
 躑躅山径はつきりとできて人

福山 竹下陶子
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 石川 辻口八重子
 同 同
 愛知 岩松草泊
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 東京 今井肖子
 同 同
 熱海 嶋里一步
 同 同

笑顔

稲畑汀子

ホトトギス千四百号の祝賀会が年尾忌の翌日の平成二十五年の十月二十七日にグランドプリンスホテル新高輪で開催することに決まった。忌日が土曜日、祝賀会が日曜日ということ準備が始まった。

「先生、その日はねりんピックの大会と重なります」

ねりんピックは日本伝統俳句協会からも選者が参加することになっていて、抜ける訳にはいかない。場所は高知と決まっていた。

高知の橋田憲明さんを始め、千原叡子さんを中心に主として関西の方々からねりんピックに参加して頂き、その替わり東京での祝賀会に参加出来なかった方々のために関西でも千四百号の祝賀会を開こうということになってほっとした。間もなくホトトギス千四百号関西祝賀会が平成二十六年三月二十一日、大阪リーガロイヤルホテルで石川多歌司さんを実行委員長として開催されることが本決りとなった。

「今度の関西祝賀会準備幹事会には先生にどうしても来て頂かな

いと……」

困り果てたような声で叡子さんから電話があった。

「皆さんの熱意が高揚しすぎて困るんです。いろんなアイディアを出してくださいなんですが、一方では一糸乱れぬ統制を示すことがお客様にホトトギスの力を示すことになるという強い意見もあって、侃々諤々の議論になって泣きだしそうな人も居るほどなんです」

「わかりました何時でも行きますよ。一喝すればよいのでしよう」

「はい、そうです」

「それほど皆さんが一生懸命にいい会にしたいと思つて下さるのだから有難いわ」

「よろしくお願いします」

四百三十人を超える方々のご出席を頂いて祝賀会が始まった。最初は関西ホトトギス同人会長の稲岡長さんの挨拶であった。東京の祝賀会で私はホトトギス主宰を長男廣太郎に譲り、私は名誉主宰として後見することを発表し、そのことが新聞や雑誌に報道され論評もされている時期にあつて、長さんは先ずそのことを取り上げ、ホトトギス同人が一致団結して廣太郎新主宰を守り立てて行く覚悟を力強く述べられ、次いで私のこれまでの俳優を

「通覧して総括して下さったのだが、中でも現在の俳壇に生まれつつある虚子回帰の気運の原動力となったと言って下さり、虚子回帰と言っても単なるリバイバルではなく、現代に通ずる虚子の新しさを発見したことが重要で、それは過去の誰も成し得なかったことだと言って下さった時には、過分だと思いながら胸が熱くな

った。
次々に壇上に立たれた方々の挨拶が続く中で、NHK出版の古澤さんのご挨拶に、この度、出版された『花鳥諷詠、そして未来』の表紙の撮影について話された直後から、会場の外のブースに並べてあった本が次々売れたそうである。

東京から参加して下さった河野美奇さんは、ご自分と俳句との出会、私との出会などしみじみとした語り口でお話し下さった。朝日俳壇の宇佐美貴子さんは朝日新聞と虚子との関係をお調べになって来て判りやすく具体的に話された。

甲南大学グリーンクラブの卒業生有志のコーラスは抑制の効いた抒情性と力強さが素晴らしいと思った。俳人の山西商平先生や竹田賢治さんのお顔も壇上に並んでいるのでびっくりした。

「本当にいい会でしたね」

「誰もがここにこしてましたね」

「御馳走も美味しかった」

「石川多歌司さんの準備と会の運営も遺漏がなくて、それでいて堅苦しくなくてよかったですじゃないの」

みんな満足した笑顔でホテルを後にした。

